

これにてさらば

中島八十一

今を去ること四十年。九月に入りたるはずが都下八王子にては三十九度超ゆる猛暑なりとラヂオ告ぐ。翌月に産み月迎ふる妻の定期健診に産院訪るるに切迫早産の状態にあり。そのまま入院の要有りと職場の余に電話にて告ぐ。産院には二歳になりたるばかりの娘連れて訪れ居りし。對應に如何なる工夫有りと一、二分の考慮の後に、愛知の母を東京に呼び、その一兩日、母が介護せる祖母の面倒を彼の地に在住する余の姉に委ねむとそこまで判断せし。

夕方には母上京し、孫娘と共に洋食屋に在りたり。思へば當時母は六十代。この一文書きつる余より余程若ければこそ可能なりしか。さて明日からの方策は如何せんと案ずるに、娘は愛知に連れ行き、余と同郷の妻の郷に預くることとす。妻の實家にはそれなりに人手有ればなり。

翌日、娘、母、余の三人にて新幹線乗り愛知に向へり。常なればはしゃぐ娘の車窓の外を眺むるのみにて一言も發せず。次いで市電を使ひて娘の見知らぬ家に着きたるに、一瞬の隙に父と祖母は眼前より消えたり。大人の姦計恨みて丸二日この世のものとも覺えぬ泣き方に暮れたりとは後に知ることなり。

さて母と余の再び市電使ひて新幹線の驛に着き、余は驛構内に、母はロータリー向ひ側にあるバス停にと別れたり。その距離百米。聲届かざるに母余に向ひ片手舉げ、靜かに振る。余も返ししばらく交歓續きたり。

時所變はりて余は醫學部並びに附屬病院に於ける師匠並びに奥方を乗せて目白通りを走ったり。余の歐洲留學中にも突然實驗中の部屋に現れ驚きたるも今はただただ懐かしき思ひ出なり。その師匠年餘の眼疾にて兩眼の視野中央にテレビ大の黒き缺損有り。見得るは周邊のみなれば日々の暮らしのすべてを奥方に依存するばかりか、本、テレビを見ることが全く叶はず。余の役割は埼玉縣の施設に依頼し視野周邊の網膜像を視野中心に眼療器具の調整圖ることに有り。道路脇には季節にありて山法師の白き花咲ける家有り。今走るは目白通りなりやと師匠の質問有り。己の矜持故の質問なりや。山法師見えたりや。

幾時間かを掛けて慎重に器具の試用なすに、師匠一言も發せず。待ちたる間に思ふは何故かくなりしかと後悔と過去の視覚全き折の記憶の反芻ばかりならむとは當事者ならずとも容易に想像し得ることなり。擔當醫奥方と余に向かひて後日器具の完成したらむにはその旨知らずと傳へて當日の診察終へり。

余車を出すに師匠のこれよりは電車にて歸ると宣へれば、最も近き私鐵驛まで送り届けた。それが驛の改札口二階にあればエスカレーター有り、しかもエスカレーターの驛の外より全貌見ゆる構造なり。兩人エスカレーターにて上がる様を車より降りて眺むるに中段過

ぎし頃まづ奥方、續いて師匠余に向ひて片手を振る。師匠余の姿を見たりしや見ざりしや、分明ならず。余も兩人の姿隠るるまで片手大きく振りたり。幾年か過ぎ、奥方病にて亡くなれば後を追ひて師匠も自死せり。

（令和六年十一月二十三日受附）